
物語の中の銀の髪

憑依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語の中の銀の髪

【Nコード】

N6778X

【作者名】

憑依

【あらすじ】

「マジック・テイル」最新ヴァーチャルリアリティのVRを使ったMMORPGである。
「マジック・テイル」をテストの頃からやりつづけている主人公が「マジック・テイル」の100年後の世界に!? 「マジック・テイル」のアバターであったレイという女性キャラクターになった男の娘の冒険の話

第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか（前書き）

これは初投稿の作品です。文字が抜けていたり、表現がおかしかったり、投稿がおそくなってしまうたりするかもしれない。それでも見ていただけたら幸いです。

第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか

ふと目を開けると光が溢れていた。

「あれ？」

ふと疑問に思った。 おかしい、俺は今日、休日だということでMORPG「マジック・テイル」をやり深夜2時頃に寝たはずだ。

この「マジック・テイル」は4年前に登場した剣と魔法のRPGである。 だが米国の軍隊に使われたVRヴァーチャルリアリティというのを使いあたかも本当にゲームの中にいるような気分にするらしいその新機能を使った事により評判を呼びいまじゃ日本最大のMMORPGとなった俺は「マジック・テイル」の テストの頃からやっている。 今じゃ俺は最古参といってもいい廃プレイヤーである。

とりあえず起きて現状を確認しようと起き上がった。 周りは富士の樹海・・・というよりモンソンのフィールド出てきそうな森が広がっていた。

「……なにここ？」

そう呟いたところでふとおかしい事に気がついた。
声が高い普通の俺も男の中では声が高い方だがこの声は鈴が鳴ったような声で呟いた。

よく見れば自分の服装や体もおかしい。 着ている服はそのまんなまワンピース。そして男なら普通持っていない大きな二つの膨らみが・・・

「はい!？」

胸がある!？ 顔が女らしいと言われ続けた俺が少しでも男らしくなるうと筋トレを続けていたのに筋肉の代わりに脂肪の塊に!？
これでは本当に女だと言われてしまう!

慌てて自分の胸以外の体を触りまくる。男らしいがっしりした腕が柔らかくなっている! 足も細くほっそりとして真っ白くなっている……俺の日焼けしまくりの男らしい足が……すね毛は元々なかったけど。

そして髪は腰まであり、サラサラした銀髪。

完璧に女になってしまっている。それ以外には耳がなぜか細長くなっている……ん?細長い耳、腰まで届く銀髪、そしてどちらかと言えば大きめの胸……この姿まだ顔は見えないがどこかで知っているような気がする……とりあえず男らしくなるうとしていたが何故か女になっている自分の体にテンションが下がりつつもこの樹海のような場所から出ようと思った……流石にこんなところに人はいないだろうしな。

俺の名前は、白崎^{はくせき} 陸高校^{りく}2年生16歳いまさら自己紹介してもやや遅い気がするがしておこう。俺は生まれつき顔が女らしかった。そのせいで男子にはからかわれ続け女子に「かわいい」なんて言われてしまうような男だ。ちなみに中学の頃の部活は家庭科調理部に入っていたおかげで男子よりも女子のほうが友達が多いという状態になっていた。なに?羨ましい?ふざけるな!修学旅行の部屋割り男子から「そういえば白崎って、男子だったな。」とか言わ

れて三日間落ち込んだ事もある俺に謝れ！

こんな嫌な記憶を俺は誰に説明してるんだ？ テンションが落ちてるせいで何かとナーバスになっているのかもしれない……

周りから黒いオーラが出てるかもしれないなーっと思いつつゆっくりと歩くと湖が見えてきた。周りには木々がないから時々人が来てるのかもしれない。

「お、ここなら。」

湖に近寄って湖面に顔を近づける。湖に映った自分の顔は感嘆と驚愕と予想していた事が当たってしまったいなんかひどい顔になっていた……ここまでひどい顔は好きな女の子に告白したら「私、男の子がすきだから……あ、陸君は男の子か。」といわれたとき以来かもしれない。とりあえずため息をついた。湖に映った顔は、優しさで冷静さを併せ持った、笑顔が似合いそうな少女の顔をしていたが、目は水色に近い色をしていて、長い銀髪と普通の人間には見えない細長い耳。俺は、つい湖の中の少女の前でボソリと呟いた。

「やっぱりレイになってる。」

まあ、レイっていうのは「マジック・テイル」での俺のAvatarだ。中学二年生の時、数少ない男友達に誘われテストに行った。

正直MMORPGは初めてだったが、とことんハマった。その時に作ったAvatarがレイである姿は湖に映った自分と全く同じ姿でエルフの女性に設定した。何故女性にしたのか？……まああの頃は精神的に鬱でこんなに女らしいなら女で生まれてくれればよかったのに……とか思っていたからせめてゲームでは女でいようと思っていたのだ。

「……………ネエ、ネエツテバ。」
「ん?」

湖の水を飲みつつこれからどうしようかと考えていると何か声のよつな者が聞こえる。 周りを見渡すが誰もいない。

「……………ナニシテルノ?……………アア、ザンネンダケドミエナイヨ?」
「……………え?ああ、精霊か。」

精霊……………まあ簡単に言うと大地のエネルギーの塊のようなものと「マジック・テイル」の公式HPには書いてあった。 エルフ系の種族専用のスキルで「対話」というのがあり、精霊の多い場所（森など）にいると精霊と会話する事によって遠くにいる魔物やプレイヤーの場所がわかるというスキルがある。 たぶん精霊が自分をエルフ系だと分かって話しているのだろう。

「何か用かしら?」

いつもの俺はこんな喋り方をしないが。 この体がレイであると分かるつついつい「マジック・テイル」の時の喋り方になってしまう。

「アナタハイセカイカラキタ?チガウ?」

「え?なんで知ってるの?」

「ダツテワタシチガヨンダカラダヨ?」

「あなた達が呼んだって……………私を?後なんでこんな姿?」

なぜレイの姿なんだろう?……………まあ実はうれしいが。

「ソレハ、コツチノカラダノハウガツクリヤスクテセツメイシヤス

イカラ。」
「説明しやすい?」

精霊の話によると、俺の元居た世界にあったMMORPG「マジック・テイル」はこっちの世界の100年前の姿、形、魔法、国、政治の状態などがそっくりだったらしい。その影響かどうかは分からないらしいが世界どうしが惹かれ合っつてぶつかる寸前にまてなっていたらしいが神様達がんばって少し遠ざけたらしい。

「もしぶつかったら?」

「フタツノセカイガブツカルト、ブンメイがマザツテタイヘンナコトニナツテタ。」

のどかな草原にいきなりビルが建ったりしていたかもしれないそうだ……

「アンシンシタノモツカノマ……コノセカイニマオウガデテクルカモシレナイノ……」

「魔王?世界征服でもしてくるの?」

「ウン……」

最近隣の大陸闇の力を使い、大陸統一をし、「魔神」と言われている人がいるらしい。そしてその「魔神」がさらなる土地を探しているらしい。まだこの大陸は見つかっていないが時間の問題らしい。闇の力は、木々を枯らせ水を黒くし、空は太陽が見えなくなる程暗雲が覆うらしい。そうなれば精霊はみんな消えてしまうらしい。だが「魔神」に対抗できる人はこの世界にはいない。

100年前にあった戦争でMMORPG「マジック・テイル」では当たり前だった魔法やスキルは今の人々は使えないらしい。そこで、精霊達は神々と交渉して遠ざけていた俺の居た世界の「マジック

ク・テイル」をしていた人達から一人選んで、こつちの世界に連れてきたという事らしい。さらに神様が「マジック・テイル」の装備、魔法、スキル、姿などはこつちで作った方が色々と楽だからという理由で魂だけを持ってきたらしい。

「何で、私が選ばれたんですか？」

「セイレイトカイワガデキルエルフデ、イチバンツヨイカラダヨ」

「……ああそういうこと。」

精霊と会話ができるのはエルフ系の種族のみ、さらにエルフ種で一番強い俺が指名されたらしい……

「マジック・テイル」には種族と職業がある。種族というのはヒューマン、エルフ、ドワーフなど様々な種族があるが、英雄度を使うと上位種になれたりする。ちなみにギルドの依頼を解決したり、国に貢献したりすると英雄度がもらえる。たとえば、エルフの上位種にはホーリエルフ、ダークエルフ、さらにその上位種にハイエルフがある。ホーリエルフ、ダークエルフは英雄度を使うだけでなれるが、ハイエルフはエルフ系の種族がなれる上位職全てをカンストのレベル500にしなければいけないという。

職業は、剣士、魔法使い、僧侶、狩人、格闘家などがある。職業はレベル一定まで上げたり上位種でなければいけないなどの条件がある。さらに面倒くさいのがホーリエルフ、でしかなれない職業やダークエルフでしかなれない職業があつたりする。ちなみに転職は魔法使いから剣士になるということもできるがレベルは1になる。だがまた魔法使いになると魔法使いだった頃のレベルになる。つまりハイエルフになるには英雄度を使いホーリエルフになり、上位職をレベル500まで上げ、さらにダークエルフになるために英雄度を使いダークエルフでしかなれない上位職になると

いう行程が必要になる。だがこの行程が済むとエルフの最上級職のエルフマスターになれるようになる（エルフマスターになったらまたレベル1からレベル上げになるのだが……）。エルフマスターになると元々上位職で手に入れたスキルを全て使え、エルフが着れる装備全て装備できる。このエルフマスターになった（さらにエルフマスターのレベル500）のは俺だけである。ちなみにたった4年間でエルフマスターになれたのには理由があるが後々説明しようと思う。

「じゃあ、今の私はハイエルフでエルフマスターでレベル500で全ての装備を持っているってこと!？」
「ウン、ソウダヨ?カミサマがヨウイシテクレタヨ。」

俺の4年間で意外な形で有効活用されたのであった……

第1話 魔法とか初実践とか少女とか

「そういえば、魔法も、使えるのよね。」

「ソリヤモチロン。アナタノイウ「レイ」トカイウヒトヲモトニシテルカラネ。ツカツテミルノ？」

「え？まあ、やりかた教えてくれる？」

「ウン！イイヨ。」

湖のすぐ側で足を伸ばして座りながら精霊と喋っている俺。傍から見ると独り言を言ってるようにみえないか心配だが魔法は打つてみたいのでそんな周囲の事は心配しない。周りに人はいないしね。

スキルには、何種類がある。火の玉で敵を攻撃したり仲間を回復したりする【魔法】。暗いダンジョンで明かりを灯したり、水の上を歩いたりする【補助】。モンスターを召喚して速く移動したり戦闘を一緒にしたりする【召喚】。武器やアイテムを作る【制作】。居合い切りなどの【魔法】と似ている【奥義】の5種類がある。精霊によると魔法は最初に魔力を集中させると魔法が発動するらしい。多分魔力とはMPの事だろう。そう思えば「マジック・テイル」の時と大して変わらない。俺は、精霊に色々助言を受けながらも魔法を発動させる。

「ハアッ！」

「ワオッ！スゴイ！」

今つかったのは【魔法 アタッカー】である。【魔法 アタッカー】とは自分のパーティメンバーの攻撃力を上げる魔法だ。ファイア等の攻撃魔法を使ってみたい気はするが、精霊が「ワタシノイバシヨヲコワサナイデ！」と言ってきたのでステータス変更の魔

法を使っていた。自分の体がほのかに暖かくなっている気がする。無事成功したようだ。

「そういえば、私の持っていた装備と違って……この聖女のワンピースだけ？」

「ウウン……タシカカミサマガ【ホジヨ】ニアイテムボックスガダセルツテイツテタツケ？」

「【ホジヨ】？……ああ【補助】ね。」

精霊がカタコトで喋っているせいでちょっとわかりづらいな……。とりあえず魔力を集中させ【補助 アイテムボックス】を念じる。目の前にいかにもRPGでありそうな宝箱が出てくる。……魔

法が便利すぎて困るな。宝箱を開けて中を見てみるが、真っ黒で底が無さそうである。どうやったら防具とかが出てくるのだろうか。

精霊に聞いても「サア？」だそうだ。それぐらい教えてくれよ神様、俺はエルフマスターになるのにどれほど装備を集めたか……

「マジック・テイル」の装備には全てランクがある。一番低いのがEランク、その次にD、C、B、Aと続き最上級にSランクがある。俺の今着ている聖女のワンピースはSランクである。防御力は他のSランク装備に比べると低めだが、装備の見た目とMP消費20%カットというスキルの便利さで主に俺が気に入っている装備である。それ以外にも俺は、破魔の弓などのSランク装備をいくつか持っていたんだが…… などと悩んでいるとアイテムボックスの中の一つのまにか金の装飾のされた弓、破魔の弓と矢筒が置いてある。破魔の弓と矢筒を出しながらしげしげと眺める。……うん本物だ。オリハルコンで作られた白と金の美しい弓。光属性付与の弓系の最強装備である。

「イキナリユミガデテキタ！」

「うん……すごいー！」

これは本当にすごい、流石魔法！ なんでもありだな！

とりあえず一通り確認出来たためそろそろ旅に出たいと精霊に伝えると丁寧近くの町を教えくれた。ちなみにアイテムボックスは消えろと念じるとスツとまるで幻のように消えてくれた。本当に便利すぎて言葉が出ない…… この後、しばらく森の中をさまよいつつも外に出た。森の外は草原が広がっていた。草は自分の腰ぐらいまで伸びている。正直邪魔だと思いつつ俺は、草を払いながらすすむ。とりあえず今の心配は寝るところが見つかるかどうかだその後に「魔神」のことは考えよう。「マジック・テイル」には大陸が一つしかなかった。もしかしたら「魔神」は俺が知らない種族かもしれないし、魔法だって未知のものがあるかもしれない。正直さっぱりどうすればいいか分からない。ならせめて今の世界の事を知っておく必要があるだろう。……よくよく考えればモンスターの出てくる場所で他人から見れば弓は持っているが、ワンピース一つ、素足の少女が歩いている……うん、かなり非常識だ。「靴も履けばよかったかな？」何て呟いていると男の怒声が聞こえる。

「オラア！いつまで逃げてるんだよお！さつさと積み荷を降ろせえ！」

「もう逃げられないよう？おじさあん？諦めたらあ？」

すこし近づくと馬車に乗っている太った商人らしき人が7人のいかにも盗賊やってますって感じの人達に囲まれている。あたかも近くにいるような説明をしているが、今は大体200m位の所で眺めている。【補助 ホークアイ】という職業 狩人のスキルで見

ているこれをつかいないながら弓を使ってモンスターに気づかれる前に倒すという事もできる。……うーん、盗賊も人だし弓を向けるのは申し訳ないとは思うが、ゆっくりと腰を低くし草に隠れて進む……盗賊と商人がまだ言い合っている……意外と盗賊は良心的かもしれない。盗賊と商人との距離は大体100mぐらいにまで近づいた。ここから当たったら普通は奇跡に近い。だが俺はハイエルフでエルフマスターでレベル500の廃プレイヤーだどのぐらい遠くからモンスターに当てられるか一人でやって350mから当てたこともあるここなら十分すぎる。静かに弓を引く。狙うは一番商人の近くにいる金棒を持った無駄に筋肉ムキムキの大男。出来ればうまく脅したいので商人を殴ろうとしたところを金棒に打ちたい。え？何格好つけてんだって？いいじゃん！ちよっとロマンじやん！

「もううつぜえ！さっさとよこしやがれ！」
「う、うわあああ！」

そんな事を思っていると無駄筋さん（俺が命名）が金棒を振り上げるやっぱり見た目通りの短気な人ようだ。それでも冷静に素早く矢を放つ。矢はまるで引き寄せられるように金棒の上の方に当たる。

「うおっ！？」
「ヒイツ！」

金棒は予想通り無駄筋さんの手から吹っ飛ぶ。商人はもうびびって馬車の上で丸まっている。無駄筋さんや他の盗賊は一瞬動きが止まったが、盗賊の一人が俺の方に向けて叫んでいる。流石に遠くてよく聞こえないが多分「襲撃したのはアイツだ！」とか言っているのだらう。……おっ！3人の盗賊がこっちに走ってくる。

他の4人は馬車の周りで商人が逃げないように囲んでいる。とりあえず俺は【奥義 パラライズアロー】を打つ事にする。【奥義 パラライズアロー】はダメージが与えられない代わりに当たれば80%の確率で相手が動けなくなる麻痺を発生させる事ができる。

「ウヒイツ!？」

「アハツ!？か、体がっ!？」

「……グフツ。」

走ってきた3人の盗賊がかなり個性的に倒れる……ムサイ男が「アハツ!？」とか言うなよ……なんだよ「アハツ!？」って。3人の盗賊を踏んで行きゆっくり残りの盗賊の所に歩いて行く。残りの4人は警戒しつつも俺に話しかけてきた。

「……貴様、何者だ!」

「ガツシユ達をよくも!」

「ガツシユ達って……あつちで倒れている人達の事? とりあえずここから離れたら見逃してやらないでもないわよ?」

正直精霊と話したただけだから言葉が通じるか分からなかったが俺の喋っている言葉は通じているようで、盗賊たちがまだ若いエルフに見逃してやると言われてイラついているようだ。

「……チツ、おまえら!さっさと退散するぞ!」

残りの4人は3人の盗賊を担いで走っていく……ふう、とりあえず一人も殺さずに何とかなったな。太った商人はこっちを見ている。なんか視線がとてつもなく嫌だ。表現するなら電車の中で女子高生に痴漢をする前みたいな視線を感じる……なんで分かるんだって? 私服の時は何回か痴漢を受けたことがあるからだ……

「大丈夫ですか?」

「ああ、助かりました。盗賊に見つかってしまっし、困ったものです。で、ど、どうですか？私の所に雇われてみませんか？ええ、ええお金は後で出しますよ？せめてオルアナ王国までいいのでどうでしょう……グへへ。」

話しかけるないなや、いきなり早口でいまくる太った商人。おそらく、護衛という仕事以外にも美少女なエルフと会話が出来れば一石二鳥的な事を考えているのだろう。はつきり言ってこんな奴なら助けなきやよかったと思いつつ、おかしいことに気がついた。

「そついえば商人さん。何でこんな人が通らない道を通ったんですか？こんな人気のないところを通っているのが盗賊に見られたらそりゃ襲われもしますよ。」

「う……そ、それはだな。この積み荷が大事なものでな、いち早くとどけなければならなかったのだよ。」

「ふーん……じゃあその大事な物をちよつと見せてください！その中身によつては雇われてあげますよ？」

「な！それはダメだ！」

「ふーん、ま、勝手に見ますけどね〜」

「ん？ハハハッ！嬢ちゃん面白いことを言うねえ。この馬車は今、最近出来た【魔法 硬化】を使って防御力が上がっているんだ！いくら嬢ちゃんの弓の腕がうまいからって壊れないさ。」

商人がニヤニヤしながら説明してくれた。【魔法 硬化】はその名の通り自分、もしくはパーティメンバーの一人の防御力を上げる魔法で、俺も持っているし、魔法使いがレベル5にもなれば覚えるような魔法だ。なんでそんな偉そうに自慢しているのだろうか。

「別に誰も壊すなんて言ってますんよ？」

「ん？じゃあどうやって見るんだい？」
「こうやって見ます【補助 サーチ】。」

【補助 サーチ】は、敵のモンスターや他人のキャラクターのレベルや装備などを見たり、フィールドに生えてる植物を探したりするのに使うスキルである。そしてこのスキルを使っているときは馬車の中のキャラクターのレベルや道具も見えたはずだ……【補助 サーチ】で見えた物は俺の想像通りの物だった。

【アリア レベル6 エルフ】

どうしてこんな人いない所を一人で渡るのが……多分人さらいのようなことをしたからではないかと俺は推測していた。もし違ったらとしてもどうせロクでもないものだったに違いない。俺は素早く馬車の後ろに走る。この馬車は外から中の物がみえないように窓一つない木の箱になっていた、唯一の扉は後ろにあるのを盗賊に近づいているときに見た。そこには南京錠で扉が開かないようにされていたが、俺は南京錠に対して魔法を発動する。

「【魔法 ウイングカッター】！」
「な……！」

商人が絶句しているのを無視して南京錠を風の刃で真つ二つにして、扉を開ける。そこには、エルフ特有の長い耳、肩につくぐらの長さの黒髪、そしてぱっちりとした青い目は目を見開いている。俺は呆然としている商人の方にゆっくりと向き、今までの人生で2番目くらいの笑顔をする。

「あなたは私に人さらいの手伝いをさせる気だったんですか？」
「うっ……ゆ、許してくれ！ こうでもしねえと女房と息子を養え

ねえんだ!」

「そんないいわけは聞きたくありません。死にたくなければ早く私の視界から去ってください。」

「ひ、ひいい!」

悲鳴を上げながら、草をかき分けていく商人。俺はそれをしばらく見ていたが、その目を馬車の中の少女に向ける。

「大丈夫?」

「あ、はい。」

「どうして連れ去られていたの?」

「え、えーとですね。私は、ハイナ教国の小さな村に住んで居たんですけど、定期的に村に商人が来るんです。私が外で遊んでいたら、馬車が一台だけだったんで不思議には思いましたけど商人だと思って近づいたらいきなり捕まえられてしまって。」

「そう、それは大変ね。」

「……そういえばですけど、ここってどこですか?」

「……それは、私も分からないの。」

「……ええー。」

黒髪の少女の呆れた声が草原にむなしく響いた。

第2話 初めての空の旅（少しだけ）（前書き）

視点変更が少しだけあります。

第2話 初めての空の旅（少しだけ）

とりあえず商人の置いていった馬車に二人で乗り、精霊の言っていた町を目指す。今は背の高い草がない、物語ではよくありそうな、なにもない草原を走っていた。アリアというエルフの少女（14歳らしい）は自己紹介して馬車に乗ってからは全く会話がなし……正直この沈黙は俺は苦手だ。しかし何か喋りたいけど、今のこの世界のこととはよく分からないため何て話しかけたらいいか分からないという状態に陥っている。

「……あの。」

「ん？何？」

「今、何処に行こうとしているのですか？」

「うーん、とりあえずこっちに行けばいいって精霊は言ってたんだけどね。」

「何処の国の町かは聞きましたか？」

「ん？知らないって精霊は言ってたよ？」

「そ、そうですか……」

なんか、アリアは俺に不安げな目を向ける。まあ、何処に行ってるかさっぱりだから気持ちには分かるが。

しばらく移動し続けてきたが、日も沈みかけてきたので、アリアちゃんと野宿の準備をする。とは言っても、馬は周りの草を適当に食べていて、俺は【召喚 ナイトウルフ】を発動していた、ナイトウルフはレベル50くらいででてくるモンスターだが一回に五匹くらいで出てくる事が多く初心者キラーとも呼ばれたモンスターだ。俺は、ナイトウルフを5匹程召喚し、モンスターが来ないかどうか見張らせている。

「……あの、召喚どうやったんですか？」

「どうやったって……スキルを使ったただけだよ？」

「でも……召喚は三人がかりでやらないと出せないって……」

「え？そんなに必要なの？」

「えっ」

「えっ」

「……あなた何者ですか？」

「何者って言われても……言っなら森の中でずっと引き籠もり生活をしてたとか？」

「……とかつて言われても……」

ひとまず世間知らずキャラで行けばなんとかなる！……きっと。

〜次の日〜

とりあえず、起きて商人の置いていった食料を適当に食べ、ナイトウルフの召喚を解除する。【召喚】で出されたモンスターや使い魔は大体12時間で自然に解除される。それ以外にもプレイヤ―が解除を命令すれば消えてくれる。「マジック・テイル」では攻撃を一緒にしてくれたり、空を飛べるモンスターなら乗って移動したり等は出来たが。こっちの世界ではもつと細かい命令を聞いてくれるようだ。

馬車にアリアと乗っていると大きな砦が見えてきた、ここが国境なのだろう……多分。

「……あの。」

「ん？何？」

「入るのには通行証とか必要じゃないんですか？」
「……あーそうだよーねーそうだろうねー。」

俺はとりあえず捨てられていた所をおじいさんに拾われ、森の中で生活していた世間知らずなエルフという風ニアリアに説明したので通行証は無いと確信しているのだろう。

「とりあえず中に入ってギルドカードでも作れば国民扱いされますのでとりあえず中に入る方法を探したいんですけど。」

「……私いくつか思いついたけど……どうする？アリア？」

「中に入る方法ですか？ では言ってください。」

「……砦を破壊する。」

「……却下です。」

「な、なんでダメなの！」

「むしろ聞きますけどどうやって破壊するんですか！」

「そりゃあ、【魔法 エクスプロード】で……。」

「明らかにダメです！ 目立ちます！」

「じゃあ、あそこで見張っている騎士を皆【奥義 パラライズアロ
ー】で……。」

「ダメです！ とりあえず目立ってもいいから他の人達に迷惑を掛けないようにしましょう。」

「うーん、ならモンスターを召喚して……。」

「召喚して？」

「砦を跳び越えちゃおう！」

「……まあ、それでいいです。」

アリアはとても重いため息を吐いていた……流石に誘拐されて、いきなり見ず知らずの人と旅をしているのだつかれが貯まっているのだろう。俺は、とりあえずアイテムボックスを喚びだして、破魔の弓と矢筒を入れる。そしてアイテムボックスの中から純白の

杖を取り出す。この杖はシャイニングワンドというSランクの装備である。魔法攻撃力の高さと同復量の増加、光属性の魔法の威力上昇といった能力を持っている。何故破魔の弓からこっちに変わったかつて？ 破魔の弓は、矢筒も一緒に持たなければいけないから重たいという微妙な理由なので気にしない事。

「【召喚 ペガサス】」

「はい!？」

なんかアリアがとても驚いているがそれを無視して真つ白な翼の映えた白馬が現れた。おお、現実で見るとなかなか格好いい！ペガサスは一年に一週間しかおきないイベント「伝説の駿馬を探せ！」でしか出てこないボスモンスターである。HPは高いし、上級魔法をガンガン浴びせてくる、そのくせ本人はよく逃げるとめんどくさいモンスタートップ10には入るくらいのモンスターである。

「ほ、本物？私、物語でしか聞いたことが無いんですけど……」

「本物、本物。さあ！乗って乗って！」

私が素早く跨がってその後ろにゆっくりとアリアが乗る。……

ちなみに馬車は置いといて、馬車を引いていた馬は私の使い魔扱いになってましたよ、商人から盗った時に捕獲した事になったのだからうか？

「うわ！本当に空を飛んでる！」

「そうだねー。」

ペガサスで空を飛ぶと風が直に当たり中々気持ちいい。しかも俺は、飛行機にすら乗ったことがないのでとてつもなく興奮していたが、アリアはかなりおびえているようだ。

「見て見て！皆があんなに小さい！」

「ちよっ！こんなに高く飛ばないでください！皆を越えるだけなんですからもっと低く飛んでください！」

俺はもつと飛んでいたいが、アリアがあまりにもおびえて俺の体に抱きついて胸とかがくっついていてるので、皆を越えて、一気に高度を落として地面に着地する。

「空の旅楽しかったじゃん？」

「こ、こんなのだったら、本当に皆を壊した方がよかったかもしれ
ません……」

「もう、そんなにすねないで、ね？」

涙目になっているアリア……中々かわいいなあと思いつつも二人で国境沿いの町に歩いて進む。ペガサスは目立つから召喚解除した方がいいとアリアが主張するので召喚解除しておいた。

視点変更レイ レオード

「ふむ、では行ってくる。」

「了解しました団長！このルードの町は必ずやお守りいたします！
「ハハハ！その調子だ。」

私は、今オルアナ王国の国境沿いの町ルードにいる。今日、私の部隊任務は、ハイナ教国とオルアナ王国の間にあるアルネの森周辺
の調査だ。

アルネの森は、戦争の後100年間足を踏み入れた者を返さなかったという魔の森としても知られている。その理由は異常な程レ

ベルの高いモンスター達が原因である。そのせいで、今もどちらの国の領域になっていない森だ。私の部隊はその森に足を踏み入れる予定はないがアルネの森からモンスターが出ていないか周りを調査するのである。

「ルブラ隊長！あ！レオード団長も！」

「うむ、どうした！」

「砦をモンスターが飛び越えてオルアナ王国に入りました！」

「何！何故止められなかった！」

「そ、それが。そのモンスターがペガサスでして……」

「……ペガサス！？」

ペガサスは100年前の戦争の話にも出てくるモンスターである。飛びながら魔法を使い、空から雷を降らせて騎士や冒険者達を苦しめたという。そんなモンスターがオルアナ王国に入った！？

「もし、王都に入られたら！大問題になるぞ！急いで騎士を集めろ！ペガサスを探して討伐しろ！」

絶対に、王都には入らせん！

第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇（前書き）

見てくれた方、こんな文章ですがありがとうございます。

第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇

さて、俺達が街に向かって歩いているとなんかジャラジャラと装飾がしてあるいかにも騎士の偉い人だという感じの鎧を着ている人が後ろのたくさんさんの騎士を連れてこちらに向かってくる。

「何しに行くんだろうね？」

「……あの、レイさんものすごく嫌な予感がするんだけど。」

「え？何？アリア悪いことでもしたの？」

「してません！」

アリアがそんなに悪い子だったなんて……そんな事を思っていると、派手な騎士がこちらに気付き近寄ってきた……え？何？ナンパ？だったら一瞬で火の海にするよ？

「すまない、そのエルフのお嬢さん方。」

「うわ！鎧が喋った！」

「鎧なんですから中に人が居て当たり前じゃないですか。何言ってるんですか。」

うーんアリアの突っ込みは中々厳しい。派手な騎士が唐突に兜を脱ぐと俺たちに挨拶を……うわ！若！そしてイケメンな金髪のエルフであった。

「すまない、自己紹介が遅れた。私はオルアナ王国騎士団長のレオーナだ。」

「え！えーと、アリアです。」

「レイです。」

「アリアは騎士団長だと知った瞬間なにやら緊張しているようだ。とりあえず俺はこの、騎士団長を【補助 サーチ】でステータスを見る。」

【レオーナ エルフ レベル60 剣士】

騎士団長だというのにそんなにレベルが高くないんだな。もっと200位はあると思ったが。

「そんなに強くないんですね。」

「えっ？」

あ、口が滑った。

「ちょ、ちょっとレイさん！何言ってるんですか！」

「貴様！団長のレベルがいくつか知っているのか！」

騎士団長の隣にいた部下らしき人が話に入ってきた。

「うん、一応レベル60だよな？」

「レ、レイさんそんなけんか腰にならなくても。」

「ハハハ！おもしろい嬢ちゃん達だ！」

騎士団長が、豪快に笑っている。クソツイケメンめ……

「ところで、騎士の方々がこんな大所帯で何しに行くんですか。」

「ああ、そうだ。君たちに聞きたいんだがこっちでペガサスを見かけなかったか？」

「ペガサス……ですか？」

……こつちを見ないでくれアリアよ。

「ああそうだ、ついさっき騎士達にペガサスが砦を乗り越えて王国内に入ったと報告があった。君たちも何か知っているか？」

「知っているというかなんというか……その。」

「ペガサスを召喚したのは私ですけど……」

「……へ？」

騎士達が変な声を上げる。アリアは、小声で「……もうどうでもいいや。」と呟いていたのは聞かなかったことにしよう。

「やはり愉快的な冗談を言うお嬢さんだ。召喚なんて君みたいなき子二人いても出来ないよ。」

「じゃあ、見せ「すみません！ペガサスについては何も知りません！ごめんなさい！失礼します！」

アリアに声を遮られ引つ張られて猛ダッシュで騎士達から離れていくのだった。

「なんでそんなに急いでいるのよアリアは。」

「不法侵入したって事を堂々を言っているようなものですからね！」

「あ、そっかあ。」

全然気づかなかった……

しばらく二人で歩いていると、街の門が見えてきた。この街は国境側は警備が厚いが国内からはかなり簡単に入れた。

「ここからどうするんですか？ レイさん。」

「うーん、とりあえず宿屋を探しましょうか。」

「……お金は？」

「お金……」

お金は今手元にはない。とりあえず【補助 アイテムボックス】
で中にお金がないか確かめる。

「あ、あつた！」

「……なんかジャラジャラはいつてますね。」

……アイテムボックスの中に直接硬貨が山ほど入っているとどう
見ても宝箱にしか見えない。アリアがアイテムボックスの中から
一つ取り出す。

「……本物ですね。」

「アリアこれで宿屋には泊まれる？」

「こんなに金貨がたくさんあれば一生泊まれるんじゃないですか。」

「……とりあえず聞くけど、この銅貨と銀貨と金貨となんか白い硬
貨と石で出来てる硬貨は大体いくらぐらいかな？」

「うーん、石貨は1G、銅貨1枚で100G銀貨1枚で1000G、
金貨1枚で10000G。そして白い硬貨は白金貨といって10
0万Gなんですけど……国同士の貿易くらいでしか見れないような
代物ですよ。」

「マジック・テイル」ではお金は左上の方に100Gという感じ
で出ているくらいだったのでよく分からないが、神様が俺が持って
いたお金を全て金貨とかに替えたのかもしれない。

「うーんつまりいっぱいあるっていう事？」

「……すごいまとめ方ですね。」

とりあえずアイテムボックスから金貨を数枚出して商人が置いていった袋にいれる。

「一応銀貨1枚あれば家族で一ヶ月は暮らせますよ。」

「へえー。」

「っていうか門の近くでこんなにお金を見せびらかさないでください。」

「誰もいないからいいじゃない。 ささ、早く宿屋に行こうー！」

……そろそろ思ったが俺は世界観以前になんか非常識になっている気がする。 浮かれすぎだろうか？

この街はレンガ造りの家が国境側の門から続く道に沿って建っている。 街の至る所では露天が開かれていてそこで、国境から出る人のための道具がたくさん売られているようだ。

俺とアリアは二人で歩きながら通行人に宿屋の場所を聞いて、向かう。

着いた宿屋の名前は「冒険の巢」。 ギルドに所属してモンスター退治などを仕事とする冒険者達が多く泊まる宿だそうだ。 宿屋に入るといかにも宿屋にいる気の強そうなヒューマンの女主人がいた。

「いらつしゃい！珍しいねえこんなか弱いエルフのお嬢さんがお二人とは。」

「すみません。 泊めてもらう事はできますか？」

「ワンルームでいいのかい？」

「はい。」

「何泊するんだい？」

「とりあえず一泊ですよ。レイさん。」

「うん、そうだよ。」

「二人で一泊……600Gになるけどいいかい？」

「はい！」

俺は袋から銅貨を6枚だし、女主人に渡そうとしたが女主人はなんか驚いた顔をしている。

「あんたらどうやってたらそんなに金貨を手に入れられるんだい？」

「どこか有名な貴族の人なのかい？」

「いいえ。ただの世間知らずです！」

「そうかいそうかい。中々おもしろいお嬢さんだね。名前は？」

「レイです。そして隣にいるのはアリアです。」

「そうかい。じゃあ部屋に案内するよ。」

女主人は機嫌良さそうに笑いながら、二階に上がり。 104と

札の付いている部屋の前まで案内し、部屋の鍵を渡す。

「ここは、荒くれ者の冒険者も多いから何かと気をつけなよ。後、

朝食は八時、昼食は十二時、夕食は二十一時って決まっているから、食べたければ下の食堂に来な！ いらなければ来なくていいから、

「はい！ありがとうございます。」

女主人が降りてから部屋に入る。中は机が一つ、椅子が一つ、

ベットが二つ、タンスが一つ、そして壁に時計が一つ掛けてあるというシンプルな部屋。俺とアリアはベットに座ったら、アリアが

話しかけてきた。

「レイさんはどうしてそんなに、すごいんですか？」

「すごいってどんな風に？」

「どんな風について……お金をいっぱい持ってて、とても強くて召喚を一人で出来る。そんな人いまじゃおとぎ話にしかないですよ。」

「ふふふ、実は100年前から来たのだけ。」

「そのほうが信憑性あります！」

「とりあえず目的はあるんだよね。」

「どんな？」

とりあえずアリアに精霊に言われた「魔神」の話伝える……まあ、異世界から来た、というのはうやむやにしたが。

「それで何がしたいんですか？」

「とりあえず国の偉い人とかに伝えられたらな〜と思って。」

「多分オルアナ王国は無理ですよ？」

「えっ？」

オルアナ王国？……ああ、そういえばレオーナとか言う人がオルアナ王国所属とか言ってたっけ。

「今、オルアナ王国はヴェルズ帝国と戦争寸前なので、そんな話は聞かないと思います。」

「大陸の危機なの？」

「そんな信憑性のない話より。目の前の問題を第一に考える筈です。」

「確かに。」

「なのでとりあえずハイナ教国に行った方がいいと思います。あそこはエルフ族がほとんどの国なので、オルアナ王国よりは話を聞

いてくれると思いますよ。」

「ふむ、なるほど。なら明日に、また砦を飛び越えなくちゃいけないかあ。」

「……まあしょうがありません。」

アリアの顔が青くなっているが、中々かわいい等と思っていると女主人がやってきた。

「ああ、そっだお嬢さん達、もうお風呂入れるから、さっさと入ってきな。旅で疲れたろう。」

……えっ？お風呂？

第4話 少女の回想と男の娘の苦悩（前書き）

最初はアリア視点 その後レイ視点になります。

第4話 少女の回想と男の娘の苦悩

視点 アリア

私は絶望していた。

私はハイナ教国にある小さな村の教会の神父の娘。　神父はハイナ教国では地位の高い役職であり。　村の中では他の家と比べて裕福な方だったがお父さんはそのお金をいつも村のために使い、国からも村からも信頼されている人だった。

しかし、村の入り口の近くで一人で遊んでいたら。　人さらに攫われてしまった。　真つ暗な馬車の中でこの後どうなるのか不安だった。　オルアナ王国は奴隷制がないので多分ヒューマンを第一とし、他の種族を奴隷にしたりしているヴェルズ帝国に送られてしまうのだろう。　そう思いながら、後悔していた。　どうして一人で遊んでいたのだろう、どうして商人だと思いついてしまったのだろうと。　感じているのは振動だけ。　他は何も感じない、真つ暗音一つない。

しかし、いきなり目の前が光で満ちた。　誰かが馬車の扉を開けたのだ。　最初は、ヴェルズ帝国にでも着いたのかと思っただが違った。　目の前には銀髪で白いワンピースを着ていて真つ白で金の装飾の施された弓を手に握っているエルフの女の人……エルフは二十歳になるまではヒューマンと同じように成長するので大体17歳くらいだろうか？　彼女はその後人さらいと口論をし、人さらいが逃げ出していった。　そして彼女は私に手を差し出してこう言った。

「大丈夫？私はレイ。あなたは？」

私にとって彼女は姫を救うおとぎ話に出てくる王子のように見え
た。……まあ、世間知らずな所もある人だったが、彼女が召喚を
したのには驚いた。【召喚】は100年前の戦争の時には一人で
も出来たらしいが、今は4〜5人が命をかけて使わなければいけな
いらしい。彼女はそんな事を気にせず【召喚】を5回汗一つ流さ
ずしてんのけた。ちなみに何故【召喚】が命がけになったかと言
うと戦争の時に人々が殺し合い魔法が使える人や奥義を使える人……
様々な技術が失われたらしい。今はなんとか持ち直したらしい
が100年前には何もかも劣るらしい。しかもその後には伝説に
しか出てこないようなペガサスすらも出した……飛んだときは気絶
しかけましたよ……

色々と破天荒で世間知らずちょっと天然も入っているが彼女は嫌
いにはなれない。なんだかんだ言っただけで彼女を私は信頼していた。
精霊から聞いた「魔神」の話というのもすぐに納得してしまった。
彼女に私はメロメロなのかもしれない……別に好きって事じゃな
いからね！

視点変更 アリア レイ

「お風呂ですか〜いいですね。」

風呂……女主人から聞いたその言葉に俺はふつうに答えた。

「じゃあレイさん一緒に入りましょうか。」

「そうね一緒に……えっ？」

一緒に……だと。

「あれ？レイさん公衆浴場とかには入った事ないんですか？」

「え？……ええ。」

しまった、俺は今女だった……という事は。

「アリアと一緒に入るっていう事？」

「それ意外に何かあるのですか？」

……そういえば中学の頃修学旅行で班決めの時、女子の班に入ることになった事があった。女子達が勝手に班を決め、先生に決まったと伝えたらしい。俺は最初女子の班になっても先生がおかしい事に気づくだろうと思っていたが何故か採用されてしまい女子と部屋を同じにするという出来事があった。しかも女子は俺を女子風呂に連れて行こうとし、俺がなんとか抵抗して男子風呂に入ったが、その時男子から。

「なんで女子が……って陸は男か。」

つと言われ傷つきうなだれていたところ女子は男子がやらしい事をしたと勘違いし、俺のクラスがなにやらアメリカとソ連みたいな状態になった事があった。

あのときとは違い俺は女の子だ。それもかなりかわいい。だが心は男だ！

「ちょ、ちよつと。二人でっていうのは……」

「？別に大浴場だから大丈夫だよ？もしかして小さな風呂だと思ってたのかい？」

「ちょ、ちょっと何言ってるんですか！ それじゃアリアと……いやむしる最高じゃね？ いやいやいや！」

「私とでは、ダメですか？」

「うっ……」

「何でそんなにかわいい顔で上目遣いをしてくるんですか！ こ、これでも俺は男で……」

「わかりました。入りましょう。」

「はい。」

俺の男というプライドが軽く砕けた気がした。

風呂は宿屋の一階のロビーの奥にあった。風呂は、男と女で分かれており木製の扉で分けられていた。こういうのを見るとのれんを懐かしく思ってしまう。そして当たり前だが女の方の脱衣所に今居る。ちなみに冒険者は男と女の比率が9対1くらいらしい。そしてこの宿は冒険者しか泊まらない為女風呂はめったに人が入らないらしい。

「？レイさん、どうかしました？」

「い、いいえ。何でもないわよ。何でもない。」

「？そうですか。」

スルスルとアリアの服が擦れ合う音が聞こえる。

「そういえばアリアの服とても汚れてるわね。私の服貸そうか？」

「えっ？ いいんですかありがとうございます。」

しまった！　アリアの服がやけに汚れているのに気付きつい声を掛けてしまったが。　今アリアは全裸じゃないか！　アリアの体は健康的な体をしており胸は少し控えめだが形がいい……中々いい体だ。

「レイさん、早く服脱がないんですか？」

「え、ええ。　他の人（女性）と一緒に入るのって初めてだから。」

「へえ〜森の中では一人だったんですか？」

「まあね、ずっと一人でしたよ。」

そういえば森の中でひきこもりっていう設定でした。　自分で忘れていたよ。　さてずっとウダウダしていてもしょうがない意を決してワンピースを脱ぐ……あれ、ワンピースが胸に突っかかってうまく脱げない。

「もう、何してんですか。　レイさん。」

アリアが脱ぐのを手伝って……目の前でアリアの裸体を直視しました。

「ご、ごめんなさい。」

「何がですか？　そんな事より早く風呂に入りましょうよ。　もう7日間が入ってませんから。」

「……ああ、人さらに攫われて。」

「……ええ。」

服が汚れていたのもそれが原因か……

「まあ、じゃあ7日間分入りましょうか。」

「レイさん……はい！」

アリアの笑顔がとても眩しかった。ちなみに、アリアと洗いあいました。とてもスベスベだったよ！

夜、部屋に戻りネタ装備のパジャマを二人で着る。ちなみにアリアの服と俺のワンピースは女主人が洗ってくれると言っていたが自分たちで洗って部屋で乾かしている。

「この服とかどう？」

「……何でこんな位の高そうな服しかないんですか？」

「えーいいじゃない女神官の服。」

「私、父が神父ですけど、父もこない服着てませんよ。」

「え、あなたの父さん神父なの？」

「はい、ハイナ教の神父です。」

「ハイナ教？確か明日行く国の名前って。」

「はい、ハイナ教国です。エルフの人は大体ハイナ教ですよ？」

「へえ〜例えばどんな教えがあるの？」

「例えば、食事の時は殺された者に謝罪と感謝をしなさいとか。」

「常識だね。」

「ですが、エルフ以外の人種は殺されて当たり前だという事を言いますから。」

「へえ〜 あ、この服はどう？」

「さっきのに比べればマシですが……」

「どう？魔導院の制服だけど。」

「魔導院…… 100年前にあったといわれてる魔法の学校ですね。」

「今はないの？」

「今じゃあ魔法を使えるのはごく一部の人だけですから……っついていとかこんな服もどこで手に入れたんですか？」

「内緒だよ。」

「内緒ですか……まあこの服にします。」

「うん、一応Bランクだから大切にしてください。」

「Bランク……ですか？ 騎士の人も滅多に着れませんよ。」

魔導院の制服は分かりやすく言えば黒と赤のセーラー服のような感じの服である。デザインがいいと評判のBランク装備の一つだ。まあ、魔導院の依頼を500回以上やれば誰でももらえるから別に特別珍しいって訳じゃないけどね。

「捨てないでね。」

「捨てませんよこんな高そうな服。」

アリアがその服を割れ物でも触るかのような扱いをしており少し笑ってしまった。

追記 服を買う女子の気持ち少し分かってしまった俺だ。

第5話 ちよつとした寄り道？

朝、目を覚ましたらアリアが目の前にいました。……うん、ちよつと落ち着こう。確か寝た時は別々のベットで寝てたはずだ。

「ん？あれレイさん何で私のベットにいるんですか？」

「それ、こっちのセリフです。」

「え？ああ！本当です！すみません！」

アリアが慌ててベットから出る……微妙にパジャマがはだけているのがエロイ……イカンイカンなんか興奮してきた。

「とりあえず準備しましょうか？」

「は、はい！分かりました！」

乾かしていたアリアの服をたたむ。アリアの服の汚れは落ちたが、所々破けており、やはり着れたものではなかった。で魔導院の制服をアリアは着た。俺はワンピースの皺を伸ばし、着る。

「おや、もう行くのかい？」

「はい、ありがとうございます。」

「別に感謝される事はないよ。これが仕事だからね。」

「じゃあ、アリア行こうよ。」

「はい！」

「冒険の巢」を離れループの町の街道に出る。昨日に比べると人が多く、露天も賑わっている。町には冒険者らしき格好の人や行商人のような格好の人が多く見られる。

「……レイさん、私の格好かなり目立ちますよ。」
「可愛いからいいんじゃない？」
「可愛いからって……一応王国から違法で出る前ですよね？」
「だからといって。コソコソするのは私には出来ません！」
「断言しないでくださいよ……この服予想以上に下がスースーするんですけど。」
「ミニスカート穿くの初めて？」
「スカートはいつも穿いていたんですけど、ミニスカートを穿いている人は数える位しか見たことないです。」
「じゃあ、初めての経験って事でいいじゃない！」
「まあ、そういうことでいいのかな？」

二人で露天を眺めながら国境の反対側の門へ向かう。

「あ、ポーション売ってる。」
「ポーションはもってないんですか？」
「生ものはアイテムボックスに入っていないよ。腐らせると大変だからね。」
「レイさんは入れたらそのまま忘れそうですね。」
「アリアはいちいちメモとか取ってそうね。」
「そこのお嬢さん達ポーションを買うのかい？」

露天の商人が意外そうな顔をして聞いてくる。多分こんな軽装（見た目は）の美少女（俺基準）二人が露天で冒険者や商人しか買わないような物を見ながら会話していたからだろう。ちなみにポーションなどの生ものがアイテムボックスに入っていない理由は神様がアイテムボックスの中の生ものがあると知らずに腐らせて、においが大変になりそうだから。というかなり現実的な理由で生肉などは抜いたらしい。

「じゃあ、ポーションを50個ください。」

「えっ!？」

「レイさん、その人そんなにポーション売ってないですよ。」

「うーん、まあないならいつか別に買わなくて。」

「……レイさんの金銭感覚中々スゴイですね。」

「いや、回復魔法も使えるし別にいいかな〜って。」

「一応言っときますけど、回復魔法を使えるのは十人もいませんよ。」

「え?そんなにいないの? 昨日の夜に魔法を使える人は少ないっ

て言っていたけど、どういうこと?」

「それはですね……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ!お嬢さん達!」

ちよつと大事な話がされそうな時に露天の商人が話に割って入ってきた。意外と気になっていた事だったので不機嫌気味に答える。

「何ですか? 個人的には大事な話の途中だったんですけど。」

「いや、お嬢さん回復魔法が使えるって言っていたよな!」

「まあ、使えますけど。」

「俺の妻が病気で、ポーションじゃあ直せないんだ! なんとか治してもらえないか!」

「ポーションで、直せないのに回復魔法なら治せるって言うの?」

「……確かに、薬じゃあ直せなかった病が魔法で治せたって話は聞いたことがありますけど。」

「報酬はいくらでも出す! だから治してくれないか!」

「一応……やっではみましようか。」

「レイさん、いいんですか?」

「いいも何もここまで頼まれちゃやるしかないでしょ。」

「ありがとうございます! あのいますぐでいいかお嬢さん達。」

「ええ、かまわないわ。」

商人が露天を片付けると、街道の家と家の間脇道を三人で移動する。

「……迷路みたいね。」

「はい、ハイナ教国にはこんな道は少ないですから私も初めてです。」

「迷ってしまいそうだね。」

「はい、道を覚えるのに大変そうです。」

「まあ飛べば何とかなるけどね。」

「……それはあくまで最終手段ですよね。」

「ま、この後その最終手段を使わざる得ないけどね。」

「……そうでした。」

「着きましたよお嬢さん達。」

着いた家は周りの家と比べても見た目は大して変わらないレンガ造りの家だ。家の中に入るが、写真で見たようなヨーロッパの家を彷彿とされる部屋だ。その家の二階の部屋に寝ているヒューマンの女性がいた。

「……アイナ、回復魔法が使えるという人を連れてきた。」

「回復魔法？ どちらさまでですか？」

「レイです。そしてこちらが共に旅をしているアリアです。」

「どうも。」

目の前の女性は見て分かるくらい弱っている。目の下には隈が出来ており。顔が青白い。手が常に痙攣しておりいつ死んでもおかしくないというのは誰が見ても分かる。

「……若いわね。本当に使えるの？」

「ええ、一応は。」
「……そう。」

とりあえず、俺は目の前の女性に【補助 サーチ】を使う。

アイナ レベル15 ヒューマン 町人

ステータスをもっと細かく見たいと念じる。

HP 23 / 300 MP 30 / 30 状態異常 病

病？「マジック・テイル」にはなかった状態異常だ。 とりあえずアイナの震える手を握り、全ての状態異常を治し、HPを回復させる【魔法 フェアリーライト】を使う。 アイナを光が覆う。

HP 300 / 300 MP 30 / 30 状態異常 なし

「どうですか？」
「ええ、こんなに体が軽いのは3年ぶりです。 ありがとうございます。」
「いいえ、私ができることをしただけです。」

正直言っと思っていた以上に簡単にできてしまい少し拍子抜けだった。 しかし状態異常病とはなんなのだろうか？ 後で調べないとな。

「レイさん、治療終わりました？」

「うん、出来たよ。」

「も、もうですか！お嬢さん！？」

「そうですよアイガ。 この人は私の命の恩人です。 感謝しても

仕切れません。」

「いえ、出来る事をしただけです。　たいしたことはしていません。」

「レイさんってほんと何でも出来るんじゃないですか？」

「いやいや、流石に出来ない事はあるよ？」

「とりあえず、何かお礼をさせてもらいたいのですが……」

「うん、なら……この事を他の人に話さないでくれるかな？」

「え、それだけですか？」

「ええ、それだけです。」

いわれると面倒臭くなりそうだしね。

「分かりました……何か用事があるのでしょうか。　このことは黙っておきます。」

「うん、よろしく。」

とりあえず、アリアと二人で家から立ち去るが何故かアリアは不思議そうな顔をしている。

「どうしたの？」

「いえ、ちよつと意外というかなんというか。　もうちよつと堂々と治したんだぞ……ってアピールするかと思いました。」

「……そうしたい気持ちもあるけど。　自慢したら病人がたくさん来て今後の事に支障をきたすと思ったの。　そうしている内に「魔神」が来たら色々大変じゃない。」

「意外と考えていたんですね。」

「むしろ私は、アリアに何も考えていないと思われていたのね……」
「いえ、そういう意味で言ったわけじゃ。」

「お母さんは、悲しいわあ。」

「あなたのお母さんじゃないでしょ！」

「ところで、アリアーつ聞いてもいい？」

「何ですか？」

「……………ここ、何処？」

「なんの確信もなく歩いたんですか!？」

「てっきりアリアが道を覚えてると思ってアリアに付いていったら

……………」

「レイさんが何の迷いもなく進んでいるとおもっていたのに……………」

周りにはレンガ造りの家、正直景色がさっきから変わらない……………
こうなれば。

「空を飛ぶしかないかな。」

「ま、まだ歩きましょう! 出られるはずですよ!……………きつと。」

「こうして俺たちは脇道をまだまだ迷うのであった。

第6話 迷子になって見つけた物は……

迷って大体30分近くたった気がする。景色はさっきから変わらないが、ちよつと奥地に行っているような気もしなくもない。

「うん、完璧に迷ったわね。」

「ま、まだいけます……。」

アリアの声が震えている。そんなに空を飛ぶのがそんなに嫌なのだろうか？ アリアを少し心配しつつも二人でその後も歩き続けるとふと鈴の音が聞こえた。

「ギロチンの音!？」

「なんですか？ それ。」

しまった。このネタはアリアには分からなかったか、当たり前だけど。とりあえず音源を探すと、路地のさらに狭い細道に黒猫が一匹こつちを見つめている。その黒猫はちっちゃな黒いコートのようなものを着ていて野良猫ではないようだ……もしかしてこの猫は。

「黒猫さん？」

「はい？ ああ黒猫がいますね。」

「黒猫じゃないよ！ 黒猫さんだよ!！」

「それって重要な所ですか？」

「うん！ とつても重要だよ！ あの子使い魔だもん!！」

「えっ！ つていとか何でそんなに目がキラキラしてるんですか。」

黒猫さん……俺が、「マジック・テイル」をしていた頃手に入ら

なかつた使い魔の一つだ。 使い魔は、使い魔専門の店で契約をすることで【召喚】をすることが出来るようになるのが大体だ。 だが他にもイベントや依頼、で使えるようになる物等もいる。 黒猫さんはその後者にあたる使い魔のだが入手条件がかなり厳しい。

黒猫さんは一年に一匹「マジック・テイル」のどこかに出現し、それを捕まえれば使い魔として使えるという使い魔の為手に入られるのは運以外のなにものでもない。 黒猫さんは闇魔法が使え後方からの援護にはとても便利である。 あとさらにプレイヤー達を魅了させたのが【補助 変身】という一部のモンスターしか持っていないスキルを持っていて、戦闘には関係ないが黒い服をきた12歳くらいの美少女になることが出来て、一部のプレイヤーは血眼になって探しているという噂を聞いたことがある。 はっきり言おう。

黒猫さんが欲しいです！

その、黒猫さんが細道の奥に逃げる。

「あ！待って！黒猫さん！」

「ちょ、ちょっと！ レイさん待ってください。」

俺の制止を無視して黒猫さんはどんどん奥に進む。 まるでどこかに誘おうとしているように……

「レ、レイさん……ちょ、ちょっと待って。」

「あれ？アリア顔が赤いよ？ 大丈夫？」

「レイさん、足……速すぎ。」

黒猫さんを追いかけたが、アリアが息を切らしてしまい、二人で休憩する。 どうやらこの体は、身体能力もレベル500相当になっているらしく、ちょっと動いた程度では何ともない。

「あれ？レイさん。」

「ん？何？」

「黒猫さんがこっち見てますよ？」

「え？」

俺が、後ろを振り向くとこちらをジーツと黒猫さんが眺めていた。なんだかその眼は俺に何かを期待しているようにも俺は感じた。

「黒猫さん、黒猫さん。」

「？」

黒猫さんに呼びかけると首を傾げた……中々かわいい。

「何G渡せば捕まってくれる？」

「買収ですか！？」

黒猫さんは首を横に振る……やはりダメか。

「じゃあどうすれば捕まってくれる？」

『おにじっし』

「お、鬼ごっこですか。」

『私を、どうやってでもいいから捕まえて見せて。』

どうやら黒猫さんはテレパシーが使えるようだ！

「どんな方法でもいいのよね？」

『うん。』

「じゃあ行くよー！」

「レ、レイさん……本気でやるつもりですか。」

「もちろんー！」

「少しは町の事を考えてくださいね。」

「多分壊さないようにはするよ。」
「絶対に壊さないください！」

黒猫さんが素早く走って俺たちから遠ざかる。

「アリア！黒猫さんを追って！」

「え！？はい！レイさんは？」

「色々と用意をする！」

「分かりました！」

アリアが黒猫さんの後を追いかける。こつこつ時には色々と聞かずに行動してくれるのはアリアのいい所の一つだろう。俺は、アリアが走っていくのを見た後に準備をするのであった。

視点変更 レイ アリア

レイさんは準備をするといっていたが。何をするつもりなのだろうか……とりあえず町を壊さなければいいが。

黒猫さんはまだ路地を走っていく。正直付いていくのがのがやっつた。

「うわっ！」

路地を曲がったところで黒猫さんがこつちに飛んできた。そのまま私を踏んでジャンプで家のベランダに登る。レイさんなら普通に空中を歩くぐらいならやってのけそうだが、私はそんなことできないどうしたものかと悩んでいると。いきなり路地をふさぐかのように蜘蛛の巣のようなものが二つ張られる。

『何！？』

「つゝかゝまゝえゝた。」

「レイさん！ いったい何ですか！この蜘蛛の巣は！」

「ん？トラップスパイダーの巣よ？」

トラップスパイダー……それは人くらいの大きさの蜘蛛であり、このモンスターのいる森は落とし穴や蜘蛛の巣といったトラップを大量に仕掛けることで有名なモンスターで騎士の部隊がトラップスパイダーの居る森に行くと3分の1は殉職するほど危険だそうだ。

『だが、まだ。』

「言っておくけど。 空にはシムルグがいるわよ？」

『えっ。』

「はい！？」

シムルグはおとぎ話にしか出てこないペガサスと同じくらい現実にはいないだろうとすら言われているモンスターだ。 話の内容は大体世界の始まりからいる鳥だとか…… 正直レイさんならもしかしたら召喚出来るかも……と思う気持ちもある。 そんな事思っていると、ふと空が暗くなる。 ゆっくりと顔を上げると目の前には軽く家よりも大きい鳥が……

「本物ですか！？」

「アリアまた驚いてるの？ ペガサスを見ても驚いていたじゃない。」

「そりゃあ驚きますよ……」

準備ってこれのことですか……レイさん。

「さあーで、私の使い魔になってもらおうかしら？ 黒猫さん。」

『……わかった。』

レイさんの目的の黒猫さんは彼女の使い魔になることを決めてくれたようだ。……まあ、シムルグまで召喚されれば認めてるしかないだろうけど。

「つていうかレイさんどうやって追いついてきたんですか？」

「ん？シムルグに乗ってね。アリアの姿を探したんだよ。」

「単純で恐ろしい探し方ですね。町とかは壊してませんよね。」

「もちろん！ 騎士とかに攻撃されたりしたけど町を壊しては居ないよ！」

「攻撃されたんですか!？」

まあこんな大きいモンスターが町に出たら攻撃するよね。 騎士だもん。

『あなたたちがじゃれ合ってる内に契約が終わりましたよ。』

「おお、やったー！ ありがとう黒猫さん！」

「じゃれ合ってるって……」

さつきからそんな風に見えてたんですね。 というか黒猫さん時々毒舌ですね。

「……というかシムルグさん目立って騎士が来ちゃうんじゃ……」

「あつ。」

「考えてなかったんですか!？」

「ついつい黒猫さんに意識が向いちゃって……テヘッ。」

「テヘッじゃないですよ！ どうかして早く町から出ないと。」

『町から出るだけならシムルグに乗って出ちゃえば?』

「それだ！ ナイス！ 黒猫さん！」

「……もう飛ぶ事は決定ですね。」

もう、覚悟は決めよう。遅かれ早かれ空を飛ぶんだし。

「ところでどうやってシムルグに乗るんですか？」

「そりゃあ、空中を歩いてシムルグに……」

「やっぱ歩けるんですね。」

「やっぱ？」

「……いえ、こつちの話です。」

「じゃあ、早速行こう！」

「え、ちょ、ちょっと!？」

レイさんに俗に言うお姫様抱っこの状態で抱えられる。そしてそのままゆっくりと空中を階段があるかのように歩き出す。第三者の視点で見ると絵にはなるだろうが、当事者は中々恥ずかしい。ついでだが私の腹の所に黒猫さんがベランダからジャンプしてきた。こうして見ると背中についている小さなコートと合わさって中々かわいい。そして、ゆっくりとシムルグの上に乗ったら私と黒猫さんを下ろした。

「よし！出発進行！」

「は、はい！」

『……空を飛ぶのは初めて。』

シムルグがゆっくりと翼をはためかせると下の路地が風ですごいことになっているのが見えるが今は気にしないことにしよう。そして一気に飛ぶ。その頃、ちょうど下に来た騎士達が吹っ飛ぶ。うん、今は気にしない気にしない、多分死んでないから大丈夫。

そして、シムルグは悠々と砦を越えるのであった。

第7話 空の旅とアリアの歴史の授業

視点変更 アリア レイ

シムルグで国境から離れる。 アリアは地上を見ないようになっているのがかわいらしい。

「ねえ、黒猫さん。」

『何?』

「黒猫さんは召喚解除されないの?」

『何で?』

「ん?」

確か【召喚】の使い魔は契約した直後に召喚解除して消える筈だ(確か)。

「じゃあ、黒猫さんはいつ召喚解除するの?」

『むしろ召喚解除されなくちゃいけないの?』

「え、じゃあ半日で強制解除されるまで待つ?」

『強制解除?何それ?』

黒猫さん曰く強制解除はないそうだ。 そこら辺は「マジック・テイル」との違いがあるようだ。

「じゃあ、黒猫さんはずっと一緒にいる気なの?」

『悪い?』

「いや、悪くないけど。」

「と、ところでレイさん……」

「ん?何?アリア。」

顔が真っ青になっているアリアが俺に話しかけてきた。

「何処までシムルグで行くつもりですか？」

「うーん、とりあえず国境まで？」

「やっぱり飛び越えるんですか？」

「まあね。」

「けど、ハイナ教国なら飛び越えなくてもいけるかもしれないよ？」

「何か方法があるの？ 門番を倒すとかは無しだよ。」

「しませんよ、そんなこと。」

顔が真っ青になっても冷静につっこむアリアは凄いなと思いました。

「オルアナ王国みたいに砦があるんで、検問所から直接行きます。」

「やっぱり倒す作戦じゃん！」

「違います！ 検問所のところでも人さらに攫われたけどなんとか逃げてきましたって言うんですよ。」

『そんなのでいけるの？』

「いけます！」

「どうしてそんなに自身満々？」

「ハイナ教国の国民はエルフの人の言うことは結構信じるので。」

人の良心を利用する気がアリアよ……

「そういえばだけど、アリア？」

「何ですか？」

「魔法がどうして衰退したのか聞いてなかったよね？」

「ああ、商人に邪魔された話ですね。」

『何の話？』

「うーん使い魔の黒猫さんには関係ない話かな。」

「まあ、使い魔さんは人間とは違いますからね。」

『けど、気になる。』

「まあ、話しますね。」

シムルグの上でアリアの講義が始まりました。

「100年前に戦争があったのは知ってますよね。」

「まあ、一応は。」

『知ってる。そんなに生きてないけど。』

「じゃあ、レイさんに質問です。戦争で一番危険視される職業は知っていますか？」

「ん？そりゃあ魔法使いとかの遠距離から強力な攻撃が出来る職業でしょ？」

「その通りです。」

「マジック・テイル」には国同士の戦争というイベントもあつたので分かる。空から大量の隕石が降ってきたりするのはびびる。

「それ以外にも死んだ人を生き返らせる魔法とかも昔はありました。」

『蘇られたら厄介。』

「大体そういう危険視されるのは魔法が殆どでしたので戦争の時に真っ先に狙われたのはこの国でも魔法が使える職業でした。」

「ふむふむ。」

「だから戦争の最初の頃から魔法を使える人は一気に減ったらしいです。さらに国にある魔導書なんかも焼き払われてしまったらしいです。」

「なるほど、それで魔法を教えられる人がいなくなっちゃったのか。」

「はい、だから今は魔法をまた1から研究している所なんです。」

「マジック・テイル」ではレベルが上がれば魔法を覚えたがそこから辺は違つのだらう。

「ハイナ教国はその魔法の研究が一番進んでいる国なんですよ。」
「へえー。」

アリアが自慢げにしている。 自分の国を誇りに思っているのだらう。

「あ、国境が見えてきましたよ。」

「茨の壁がある。」

「オルアナ王国のとは全然違つね。」

ハイナ教国は国境が茨で囲まれているようだ。 触ったら痛そうだ。

「確かこれも魔法で作つたらしいですよ。」

「魔法は便利だね。ハイナ教国は羨ましいよ。」

「シムルグに乗りながら言うセリフじゃありませんね。」

確かに、移動にはとっても便利だね！

「さて、アリアが慣れてきたところ悪いけど降りましようか。」

「確かに慣れましたけど……早く降りてくださいよ……。」

シムルグから降り徒歩で移動する。

『やっぱ地上が一番。』

「そうです。その通りです黒猫さん。」

なんか奇妙な連帯感を持っている二人をほほえましく見ながら進む。

「そういえばさっき居たのはオルアナ王国で今向かっているのはハイナ教国よね？」

「はい、そうですよ。」

「それ以外に国っていくつあるの？」

「マジック・テイル」では4つあったけど今はどうなっているのだろうか。

「国は3つですね。それと国ではないですが、ライヴァン同盟っていうドワーフの集まった集落が1つあります。」

「国じゃないの？」

「国ではないのですがほぼ国みたいな物です。オルアナ王国は一番種族に関する事は平等な所ですね。国王はヒューマンですが貴族は頑張ればどの種族でもなれますよ。」

「アリアは物知りだね。」

「一般常識です。」

「じゃあ、ハイナ教国はエルフが中心の国なんだよね。」

「つとつか、国民の殆どがエルフの国ですね。言ったとおり魔法の研究をしている国です。あとハイナ教の信者の集まりです。」

国のトップはハイナ2世で、女王様です。後唯一のハイエルフラしいですよ。」

「へえ〜 ハイエルフ……」

つとつかはエルフマスターなのかな？ そこら辺は「マジック・

「テイル」と違うのかな？

「残りの1つの国はヴァルズ帝国ですね。ヒューマンが中心の国で、エルフや獣人つといった人を奴隷として攫ったりしているそうです。」

アリアが苦い顔をしながら話す。

「攫う？　じゃあ、あの人さらいって。」

「……多分ヴェルズ帝国に売ろうとしていたんじゃないかもしれませんか？　奴隷つて他の国じゃあ認められていないの？」

「ヴェルズ帝国以外では認められていませんよ。」

『あそこ、嫌い。ヒューマンが偉そうにしてる。』

黒猫さんが露骨に嫌そうな声を上げる……猫だから顔はよく分からないけど。

「後、ライヴアン同盟はドワーフ中心の集まりで、殆どの人は鍛冶職人です。他の国と装備を貿易する事で利益を得ています。」

「どんな装備があるんだろう。一回行ってみたいな。」

「多分レイさんの持っている装備に勝るのは一つもないと思いますよ。」

「100年前の戦争の影響？」

「ええ、魔法以外にも色々失われたそうです。」

「よくここまで復興できたね。」

『人間の意地は怖い。』

「意地つて……。」

黒猫さんも居ると三人で会話が弾む。それにこの世界の事も大体分かった。

「やっぱ、女が三人居れば……なんだっけ？」
「姦しいですか？ しかも使い方違うと思いますよ。」

視点変更 レイ レオーナ

オルアナ王国首都アルノ ここは国王の住む城を中心に内側から貴族、平民、貧民の順で円形になっている都だ。ここに私は緊急で来た。用件は二つ。一つはペガサスが砦を越えて侵入してきたという事。侵入したのは見たという報告があるが、何処に行っただのか不明。今も捜索中だ。もう一つはシムルグがループの町に現れたという事。これはいきなり町に現れたことから何者かによつて召喚されたとされているが。どうやって捕獲または契約したのかは不明という事もあって、騎士の間じゃあヴェルズ帝国のスパイじゃないかという説もありこちらも調査中である。正直こんな大事が二つもあり、これを王様に報告しなければならないというのは色々と気が引ける。

「失礼します。」

「ほう、レオーナか。どうした？アルネの森の調査は終わったのか？」

「いえ……それが至急報告しなければならぬ事が……。」

「何？」

「それが……。」

とりあえず現国王に用件を伝えると王がなにやら悩んでいる顔をしている。まあ、いまじゃ伝説のモンスターが二体も発見されたというのだから当たり前だが。

「王………?」

「いますぐ、捕まえろ!」

「はっ?」

捕まえる?　せめて討伐とかでは?

「そのようなモンスターを使えるようになればヴェルズ帝国との戦いにも使えるぞ!」

「で、ですが。我々だけでは……」

「つべこべ言わず捕まえよ!」

「は、はい。」

オルアナ王国の現国王は四代目である。今の国王はハツキリ言うとうと自分勝手である。自分の欲しい物は意地でも手に入れようとしてしまう。前のヴェルズ帝国との対談でもその性格のせいで関係が悪化してしまった。この国王の事だから捕獲しないと気が済まないのだろう。正直言っただけかなり困ったことになったぞ……。

第8話 いざ！ハイナ教国へ！

視点変更 レオーナ レイ

やっと、ハイナ教国の国境の前に着き、茨の砦を見上げる。

「……今更だけどここの茨大きすぎない？」

「一応季節によってはバラの花を咲かせるようですよ。」

『見て見たい。』

「私も見たことないですね。」

二人と一匹で話しながら砦に沿って歩いてしていると検問所に辿り着いた。検問所にはエルフの男が二人居た。二人の格好は真っ赤なローブを着ている。初めて見る装備で少し興味がある。二人のエルフは俺たちの姿に気づいたらしくこっちに話しかけてきた。

「おや、どうかしました？」

「あ、あのですね。」

とりあえず二人にはアリアが攫われた事、私が助けたことを伝えた。

「それは大変でしたね。少し持ち物検査をしたら入っていいですよ。」

「え、もっと何か確認しないの？」

「ええ、ハイナ教を信ずる者を疑うなです。エルフは皆ハイナ教を信じていますから。」

「そうですか。」

エルフは良くも悪くも人を信じる種族であるようだ。もう一人

のエルフが黒猫さんに目を向けて俺に聞いてきた。

「ところでこちらの猫は……?」

『レイの使い魔です。』

「喋れるのか!？」

「ええ、使い魔ですから。」

「使い魔でも喋れない者は居ますよ。」

「ま、まあ使い魔なら大丈夫か……済まないがこちらの部屋で持ち物や装備を点検させてもらおうよ。」

「はい。」

真つ赤なローブのエルフに連れられて歩く。

「ねえ、アリア。」

「何ですか?」

「この人達って軍か何かなの?」

「ああ、この人達は魔導隊です。オルアナ王国という騎士みたいな人達です。」

「あのローブ欲しいなあ……。」

「そこですか……でもあのローブ、鎧みたいに防御力があるらしいですね。」

「ランクは?」

「確かDですよ。」

「Dかあ……じゃあいいや。」

「結構現実的ですね、レイさん。」

「私も色々あつたんだよ……。」

運営が悪ふざけで出現した東京ドーム位の大きさのモンスター「魔法城ジャイアントスパイダー」を捕獲しようとしたり、国同士の戦争で俺ばかりが狙われたり……見た目重視じゃあどうしようも

ないと思いき知らされた……聖女のワンピースがなければもっとゴツイ装備になっていただろう。

「……とりあえず、ここで待っていてください。担当の隊員を呼びますので。」

部屋で待つようにいった魔導隊の人の顔がやや引きつっている。どうやらさっきの会話を聞いていたようだが無視する。しばらくすると同じ真っ赤なローブを着た女性がやってくる。

「お待ちせ、じゃあ準備するからちょっと待ってね。」
「何をするんですか？」

「ん？【補助 サーチ】であなたの装備とかを調べさせてもらうよ、個人情報とか軽く無視しちゃうけどそこら辺は勘弁してね。」

「私は、それでいいですけど。」
「うん……まあいいかな？」
「？レイさん何か問題あるんですか？」
「い、いや何も無いよ？」

……今、ハイエルフでエルフマスターでレベル500だよな？
今の世界の状況からして俺はイレギュラーな筈。どうにかして隠したいがどうすることも出来ない。

「よし、準備完了。じゃあやるよ？ 大丈夫？」

「はい。」

「う、うーんまあ。」

「じゃあ、【補助 サーチ】。」

魔導隊の人がアリアを凝視して、しばらくしたら紙に何か記している。多分名前とかを書いているのだろう。

「じゃあ、次は……っえ!？」
「どうかしました?」

魔導隊の人が俺を見て固まる。

「……ハイエルフでエルフマスターってあなた何者ですか!？」
「あ、やっぱり珍しいんだ。」
「珍しいってもんじゃないですよ! ハイエルフなんてもう、女王様しかないと言われていたのに。」
「レイさんハイエルフだったんですか。 てつきりホーリエルフくらいかと思っていました。」
「そうだよ。 褒め称えてもいいんだぞ。」
「実際に褒め称えられてもおおかしくありませんよ。」
「そ、それは困るね。」

俺は自由に生きるんだ!

「あ、このことは報告書に書いても良いけど色々な人に言いふらしたらダメだよ。」
「は、はい!」

検査を終え、すぐにハイナ教国内に入れた。 なにやら魔導隊の人達が敬礼をしていた。

「何で、みんな敬礼していたんだろう?」
「ハイエルフはハイナ教では神に近い存在ですからね。 女王様くらいしかハイエルフはいないですよ。」
「ほ。」
「理解しています?」

「流石に分かるよ。」

ハイナ教国は国境に沿って森があるとアリアが言っていたが、中々大きい森だ。アリア曰く侵入者とかを精霊に教えてもらうためらしい。

「そういえばアリア？」

「何ですか？」

「あなたの故郷って何処？ 首都に行くついでに送りたいのだけれども。」

「私の居た村ですか？」

『それ以外に何かあると？』

「……私としてはもつとレイさんと一緒に旅をしたいんですけど。」

「何で？ お父さんやお母さんには会いたくないの？」

「会いたくないって訳じゃあないんですけど……村から外にでたのは初めてで、レイさんと出会えたんだったら人さらいに攫われたのもよかったかもって思ってしまう私もいるんです。」

「うーん、確かアリアの家って教会なんだよね。」

「はい、ハイナ教国は貴族が居ない代わりに聖職者が高い地位に就いていますからね。よく言えばお嬢様、悪く言えば箱入り娘っていう感じですかね。まあ、村には友達もいますし、商人の人とも喋ったりはしますけどね。」

「でも、色々と知っていたよね。」

「それは全て本からですよ。初めて見る物ばかりでしたから。」

アリアがやや自嘲気味に笑う。

「つまり、アリアは家族を心配させたくはないが。もつと外を見たいって訳だね。」

「……はい、そうです。」

「なら、簡単だよ！」
「……何かいいアイディアが？」
「アリアのお父さんとお母さんに自分の気持ちをハッキリ言って。私と居てもアリアが安全だという事を証明すればいいんだよ！」
「……レイさんは私と居ても迷惑じゃないんですか？」
「迷惑なわけではないじゃん！ むしろ私がアリアに助けられてばかりじゃない！」
「レイさん……ありがとうございます……。」

アリアが半分泣きながら答える。親の問題か、俺も昔はスカートを履かせようとしてくる母や姉に怒って、三日間家出したこともあったもんだ。アリア位の歳（俺もだな）の時には大体悩む物だというからな。アリアの友達として出来る事をしてあげたいと俺は思った。

「大丈夫！ あなたの事を言えばきっと分かってくれるって！」
「はい……そうですね……。」
「じゃあ、善は急げだね！ すみませーんその商人さーん！」
「ん？ 何だ？ 嬢ちゃん達？」

私は、後ろからきた商人の馬車に話しかける。

「護衛ついでに私達を乗せてください！」
「い、いきなり唐突だね……。」
『使い魔付きだよ。』
「うお！ 猫が喋った。」
「お、お願いします！」
「私をタダで雇えるんだから乗せなさい！」
「何故そこで命令口調なんだお嬢ちゃん！ まあ、いいけど。どこまで行くんだい。」

「何処？ アリア？」
「え、えっとシイラ村まで。」
「シイラ村？ ああ、ちょうど休憩地点にしようと思っていたんだ。
いいぜ。」
「ありがとうございます。」
『感謝する。』

商人は了承してくれたので荷馬車に乗り込む。今回乗った荷馬車はアリアを攫った人さらいの物とは違い窓が二つ有り、中には木箱がいくつか置かれている。窓にはガラスがはめられている。

「おー！ 意外と広い！」
「お嬢ちゃん……いきなりで結構失礼だよな？」
「そんな事は気にせずに行こう！」
「一応気にしなくちゃいけないと思いますけど……。」
『早く行きたい。』
「……まあ、いいやお嬢ちゃん。しっかり護衛をしてくれよ。」
「もちろん！」

さあ！アリアの故郷へ！

第9話 キモイのは苦手です……。

「うーん、馬車も中々いいねえ。」

シムルグで空を飛んで移動するのもよかったがゆっくり地上を歩くのも中々いい。今は森を抜け草原を馬車はゆっくりと歩いていく。

「やっぱりシムルグよりはこっちの方が私はいいですね。」

「地面に足が着いている方がいいの？」

「まあ、そういうことですかね。」

「スレイプニルとかは良いの？」

「……多分無理です。」

とりあえず俺は【補助 探知】で自分の半径500mを見張る。中にモンスター等の反応があれば感覚で分かるようになっていく。

「商人さん、今のところ周りにモンスターはいませんよ。」

「ん？お嬢ちゃん何か魔法でも使えるのかい？」

「まあ、使えますよ。」

「へえ、それなら護衛してもらって正解かもしれないな。」

「そうですね、そうですね。」

俺は胸を張って答える。こうした後には自分の胸の大きさを自覚して、軽くうなだれる。そういえば女だったと……。

「そういえば、商人さん。後どのくらいでシイラ村に着きます？」

「うーん、大体二、三日かかるかな？」

「二、三日かあ。」

中々時間がかかるな。 やっぱスレイプニルを使った方が早いかな？

「とりあえずレイさん。 変なモンスターは召喚しないでください
ね。」

「変なモンスターは召喚しないよ！ かつこいいモンスターを出す
だけだよ！」
「そこが問題です！」

いつものやりとりをしながら馬車に揺られながら進むのであった。

「そういえば、何を運んでいるの？」

「ああ、ライヴァン同盟から買った、武器をハイナ教国の魔導隊や
冒険者に売るんだ。 剣はエルフ達にはそんなに売れないが、エル
フ以外の冒険者も首都にはいるからな。」
「へえ〜。」

エルフは他の種族に比べて物理攻撃力と物理防御力が少ない。
その分魔法攻撃力と魔法防御力は他の種族に比べて高い方だ。 そ
のせいか「マジック・テイル」の頃から剣士になるエルフは俺くら
いしか見たことがない。 そういえばオルアナ王国の騎士団長は剣
士だったな、風変わりなイケメンもいたものだ。

「レイさんって武器色々持ってますよね？」

「ん？ まあ持つてるよ？ いきなりどうしたの？」

「いや……前は弓を使ってその後は杖……他にどんなのを使うのか
な〜っと思っただけです。」

「う〜ん、他には…… 剣も使うしナイフも使えるし、銃も撃つし、

鞭もあるし、槍だって使えるし……大体の武器は使えるんじゃないかな？」

「ただ武器あるんですか……。」

まあ、エルフマスターは伊達じゃないね。

「ん？商人さん。前方にモンスターが五匹くらいです。」

「なんだ？魔法に引っかけたのか？」

「そんな感じです。」

まだどんなモンスターか分からないが、破邪の弓をアイテムボックスから取り出す。

「どうするんだい？お嬢ちゃん。」

「そのまま前進してください。こっちに来る前に全員倒します。」

「レイさん出来るんですか？」

「もっちろん！」

「本当に出来るのかい？」

「レイさんが出来るって言ったので出来るんじゃないですか？」

モンスターとの距離が約200mくらいになったところで【補助ホークアイ】を使う。

「うわっスライムじゃん。」

「強いんですか？」

「いや、キモイ。」

「そ、そうですか。」

「スライムをキモイで片付けられるのか……。」と商人が呟いて

いるが無視する。スライムはレベル5からレベル40くらいのモンスターもいる序盤によく見るモンスターだ。だがドクエのよくなかわい姿はしておらずとにかくキモイ。表面がやけにテカテカしてる。「マジック・テイル」の時もきもかったが現実に見るとかなりキモイ。

あまり見たくないのですさっさと済ませようと。矢筒から矢を取り出し、弦を引く。

「【奥義 レインアロー】」

「奥義使うほど見たくないんですか!？」

「だってキモイじゃん？」

矢を上空に飛ばす、その後矢が何百本にもなってスライムに襲いかかる。まあ、一発当たればスライムくらいなら倒せたんだけどね。でも、キモイじゃん？

「お嬢ちゃんすごいね……。」

「キモイのを倒すにはこれくらい必要です。」

「そんなに嫌ですか。」

「もちろん!」

「……まあお嬢ちゃんが護衛してくれて本当に助かったな。」

「スライムってそんなに危険何ですか？」

「まあな、全然ダメージが効かないからあまり好んでする人はいないな。」

「ふーん。」

ちなみにスライムを倒したところを通ったらスライムはなんか緑色の液体になっていました。

二日後、俺はまだ馬車に乗っていた……当たり前か。ちなみに夜は黒猫さんが見張っていたおかげで俺の貞操の危機は特になかった。まあそんな事しそうな人ではなかったし。

「そろそろ着きますよね？」

「ああ、シイラ村にはそろそろだな。」

「そろそろですか……。」

アリアが緊張した顔をしている。

「ようやく風呂には入れるよ！」

「そこですか!？」

「大丈夫だつて! あなたの両親は分かってくれるって!」

『そうそう。』

「もしもの時は実力行使さ!」

「レイさんが言うのと軽く村が吹き飛びそうですね……。」

「……なんか分かんらんが家出でもしてたのか? とりあえず村の入り口が見えてきたぞ。」

見えるのはまだ小さくしかみえないが木の柵で覆われている村が見えている。

「さあ!アリアを巡る戦争だ!」

「何ですかそれ!？」

『おー。』

「黒猫さんもやる気満々!？」

俺はアリアの友達だ。アリアがしたいようにするのを手伝うのは当たり前だ。

「……良い友情じゃねえか。」

「ん？何が？」

「なんか知らんがそこのお嬢ちゃんの為に頑張るんだろ？」

『その通り。』

「いいねえ、青春だねえ。」

ゆっくりとシイラの村が大きく見えてくる。【補助 ホークアイ】で見ると絹のような服を着ている大人が二人、門の入り口に建っている。二人ともエルフだ。

「あれ？魔導隊じゃないんだ？」

「ん？ああ、魔導隊は国境付近や首都にしかいないんですよ。数が少ないですから。多分村の大人の人ですよ。」

『っていつかどうやってあそこから人を攫ったんだろ？』

「……確かに。」

「ああ、ヴェルズ帝国の人さらいには変わった魔法を使える奴らがいるらしい。何でも一時的に意識をなくすんだとか。」

「商人さん詳しいですね。」

「こつやつて物を運んでいれば色々と情報が聞けるのさ。」

『ふーん。』

正直黒猫さんにはそんなに興味がないようだ。ゆっくりと近づくと、エルフの人が近づいてきた。大人といっても見た目は20歳くらいにしか見えない。これは「マジック・テイル」の公式設定でも書かれていたが20歳まではヒューマンと同じように普通に歳を取るがそれ以降はかなりゆっくり成長し寿命は200歳くらいあるそうだ。

「よっウイナ。 首都に行く途中か？」

「ん？まあな。後お客様もいてな。」

あ、商人さんの名前はウイナって言うんだ。初めて知った。

「お客様？ その隣にいる二人の少女……ってアリアじゃないか！」

「どうも。お久しぶりです。」

「戦争をしにきました。」

「は？」

「レイさん、言うことがおかしいです。」

とりあえず村人に事情を説明した。

「うーん、アイウス神父が納得してくれるかね。」

「……やっぱり厳しいですよね。」

「ああ、あいつは娘に甘いが危険なことはさせたくないって奴だからな。」

「ああ、頑固親父か。」

「まあ、そんなもんだ元々旅をさせるってなれば大抵の親は反対するわ。」

「……やっぱり実力行使しかないかな。」

「とりあえず父さんに会って説得ですかね。」

「まあ、がんばりなお嬢ちゃん達。」

「ええ、お世話になりました。」

商人さんと柵のところで別れる。

「そつだ！ウイナ。」

「何だ？」

「今、ヒューマンの個人ギルドの人達が泊まってる。もしかしたら売れるかもしれねえぞ。」

「ホントか？　ありがとう！」

個人ギルドとは依頼などを受けることが出来る冒険者ギルドとは違い。　個人で集まって冒険者ギルドの依頼などを受ける人達の集まりだ。　「マジック・テイル」でも個人ギルドを作り、みんなで国同士の戦争に参加したり。　城や家などを拠点にし、みんなが集まったりすることも出来る。　時には拠点を襲撃されることがあるため防衛したり……といった事が出来る。

「なんて名前のギルドですか？」

「ああ、狼の集いだっただけかな？　オルアナ王国ではそこそこ有名な。　」

「へえ……あれ？　どうしてオルアナ王国の冒険者がハイナ教国に居るの？」

「一応冒険者ギルドはオルアナ王国とハイナ教国のは一緒のギルドなんですよ。　」

「国は違うのに？」

「ええ、何でも国の政策には従わないで民の為に働くとか。　」

「いい心がけだね。　」

「そろそろ行きましようかレイさん。　」

「そうだね。　」

「頑張ってアイウス神父の頭を柔らかくしてくれよ。　」

「頑張ってみま〜す。　」

村の方へ二人と一匹で歩く。　さあ、戦争だ！……流石に実力行使はさげたいけどね。

追記　そういえばアリアの父親アイウスって言うんだ。　初めて知ったよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6778x/>

物語の中の銀の髪

2011年11月16日22時29分発行